

# 「局地的大雨」から身を守りましょう

- 近年、ごく狭い範囲に短時間で強い雨が降る「局地的大雨」（いわゆる「ゲリラ豪雨」）により、命を落とす方や建物への浸水、道路の冠水などの被害が多発しています。「局地的大雨」から身を守るため、以下の内容を参考にしてください。

## 1 「局地的大雨」の特徴

### ▶▶ 予測が難しい

気象台によれば、現在の観測技術では、数十～数百キロメートル四方の範囲、例えば都道府県程度の範囲のどこかで「局地的大雨」が発生するおそれがあることを、1日程度前から予想することは可能ですが、「数キロ～十数キロ四方のごく狭い範囲で何時頃」といったように、ピンポイントで場所や時間を特定し、十分な時間的余裕をもって「局地的大雨」の発生を予想することは、難しいというのが現状です。

### ▶▶ 中小河川などで被害が発生しやすい

これまでの水害対策では、大きな河川の氾らんを想定していましたが、「局地的大雨」では、大きな河川に雨水が流れる前に、側溝、マンホール、町中にある用水路や比較的小さな川などから水があふれ、周辺の低い土地が一気に水につかってしまいます。

### ▶▶ 短時間で危険な状態になりやすい

平成20年7月28日、兵庫県神戸市灘区の都賀川が急激に増水し、河川内の親水公園で遊んでいた子供たちなどが流され、その内5人が亡くなりました。上流で降った大雨が原因とみられています。この時、水位はわずか10分間で約1m30cmも上昇しました。また、今年7月6日に本県郡山市で駅前の道路や商店街が冠水した際も、実際に強い雨が降っていたのは1時間程度でした。（20時～21時の1時間降水量：40.5mm）

このように、「局地的大雨」ではごく短時間のうちに河川の水位が上昇し、道路の冠水や建物の浸水被害が発生しやすくなる特徴があります。

### ▶▶ 避難する時間的余裕があまりない

「集中豪雨」の場合は、長時間降り続く雨による河川の決壊や土砂災害の発生のおそれが見込めるため、行政が比較的余裕をもって避難勧告等を発令することができますし、住民も被害が発生する前に避難所等に避難することができます。

しかし、「局地的大雨」では、河川の決壊や土砂災害といった被害の発生をすぐに予想することが難しいため、行政側も住民側も、時間的余裕があまりない状況で避難の判断をすることになります。

## 2 「局地的大雨」により発生する被害

▶▶ 「局地的大雨」による被害としては、次のようなものがあります。

- ★ 川の急な増水により中州に取り残される
- ★ 地下街（地下にある飲食店）や地下鉄の駅に雨水が流れ込む
- ★ アンダーパス（掘り下げ式の立体交差）や道路の冠水
- ★ 増水した用水路等に流される
- ★ 地下室に閉じこめられる

など

※ このほか、「局地的大雨」が発生するような気象状況下では、「竜巻」や「突風」などが発生することもあります。

## 3 被害を防ぐための対策

▶▶ テレビやラジオ、インターネット等で常に最新の気象情報を入手し、「局地的大雨」になりやすい気象状況かどうか、警報・注意報、記録的短時間大雨情報は発表されていないか、雨雲が近づいてこないかなどを確認するとともに、周囲の状況の変化に注意を払い、天気急変に備えましょう。

※ 「局地的大雨」が発生しやすい天気の前兆としては、次のようなものがあります。

- ・ 真っ黒い雲が近づき、周囲が急に暗くなる。
- ・ 雷鳴が聞こえたり、雷光が見えたりする。
- ・ ヒヤッとした冷たい風が吹き出す。
- ・ 大粒の雨や「ひょう」が降り出す。

▶▶ 避難の際は、時間的余裕があるときは避難所への避難が安全ですが、場合によっては自宅の安全な場所や、隣近所にあるコンクリート造りの頑丈な建物に避難するなど、現実的な避難をすることも有効な手だてです。

▶▶ 外出中に「局地的大雨」に出くわした場合は、すぐに水辺から離れる、浸水・冠水した場所には近づかない、頑丈な建物に避難するなど、危険な場所は絶対に避けるようにしましょう。

